



私の本棚③ ふたつの『夜と霧』（その1） ～愛する人の眼差し、愛する人の面影～



子どもの権利擁護委員 関谷 道夫



第二次世界大戦のとき、ナチス・ドイツおよび占領下のヨーロッパでは、「ユダヤ人」という理由で約 600 万人が殺され、その内の約 150 万人は 15 歳以下の子どもだと言われています。「ホロコースト」（大虐殺）と「子どもの権利擁護」を並べることは無理があるかもしれませんが、逆境の中で人は何に絶望し、何に希望を見出すのかという点では、通底するものがあります。

私の本棚には、ヴィクトール・フランクルの2冊の『夜と霧』（みすず書房）が並んでいます。心理学の先達霜山徳爾訳の旧版（1947 年刊）と、池田香代子訳の新版（1977 年刊）です。原題は『ある心理学者の収容所体験』で、強制収容所の苛酷な体験を記録したものです。

見れば一目瞭然で、旧版には、アウシュヴィッツその他のナチスによる組織的な集団虐殺を示す多数の残忍な「写真と図版」が掲載され、「解説」では、ナチス・ドイツの大戦中の動向と強制収容所の凄惨な実態がクロスするように描かれています。馴染みがあるのは、手を挙げた母と子がナチスに連行される表紙の旧版です。新版からは、これらの写真と解説は消えています。



旧版では、ナチス・ドイツが行ったホロコースト（大虐殺）の暴挙と、いつ殺されるか分からない地獄の収容所生活を告発している印象があります。霜山徳爾先生は、フランクルと同時代に生まれ、太平洋戦争を実際に体験して特攻隊の生き残りとなり、開放されて間もないアウシュヴィッツを見学し、フランクルにも実際に対面しています。ナチスの残虐性・犯罪性を明らかにしたい“感情の昂ぶり”があったと理解しています。本人も、骨っぽい、ごつごつした文体と評しています。

新版は、スマートで流麗な文章で、逃れられない極限状態に置かれた時に、破綻する者と生き延びる人の違い、拘束されている被収容者の心や生き方の変化を、被収容者であるフランクル自身の視点で忠実に描いています。

「アウシュヴィッツに到着して二日めの夜…ふいにしんとしたと思うと、ヴァイオリンが限りなく悲しい、めったに弾かれないタンゴを奏ではじめた…ヴァイオリンは泣いていた。わたしのなかでも、何かが泣いていた。この日、24 歳の誕生日を迎えた人がいたからだ。…その人とは、わたしの妻だった。」「いい人は帰ってこなかった」「人はなにごとにも慣れる存在だ」「光は暗闇（くらき）

に照る…」などの印象的な言葉がいくつもあります。

『夜と霧』は旧版と新版がバトンタッチするのではなく、二種類の『夜と霧』が今でも読み継がれています。みずず書房の売れ行きナンバー1の本だそうです。長期間のシベリア強制収容所生活をもとに『望郷と海』を書いた詩人石原吉郎は、『夜と霧』が人の心を打つのは、フランクが「告発しない」ことによります、と述べています。

いずれも、いつ死ぬか分からない苛酷な生活が続き、生き延びるための戦いは熾烈^{しれつ}をきわめた極限状態で、生き延びた人と亡くなった人の違いは何だったのか？生と死を分けたものは何だったのか？人間は天使にも、悪魔にもなりうるのか？という問いと答えを、被収容者の立場から直視し、心理学的に坦々と記述しています。現代にも通じる苦境を生き延びる姿勢が凝縮されています。

約3年の強制収容所生活から奇跡的に生還を果たした精神科医のフランクは、妻、両親、兄弟が、ガスで殺され、あるいは餓死したことを知りました。収容所でのフランクを支えてきた妻の微笑みや眼差しを直接見ることはもうありませんでした。その後、精力的に、冷静な視点で収容所での出来事を記録するとともに、極限の環境の中で、人間は、何に絶望し、何に希望を見出すのかを克明に描き出しました。それが『夜と霧』です。

『夜と霧』というタイトルは、夜陰に乘じ、霧にまぎれて人びとがいずこともなく連れ去られ、消え去った歴史的事実を暗示する言葉です。

私の父は、3年半の戦闘体験&4年半の厳寒の苛酷なシベリア抑留体験を決して話そうとしませんでした。沈黙の人でしたが、ふと漏らした「人はどんなことでもする」の言葉は今でも忘れられません。回避、悪夢、拘束の恐怖など、拘禁体験のトラウマ症状は消えることがありませんでした。日々を静かに暮らしていました。

今でも、パレスチナ自治区ガザでは、立場を替えて、似たようなことが起こっています。「人が歴史から学べることは、人は歴史から何も学ばないということだ。」という言葉があります。あながち、そうかも知れませんが、

「夜と霧が私たちの身边にたちこめることは拒否できるのだということを、忘れないでいたい。」

(新版訳者あとがき)

子どもの権利擁護委員の沼田徹弁護士が、あなたに届けたい一冊として、『夜と霧』を挙げていました。まさに誠実な沼田先生らしい選択だと思いました。

人を見つめる温かい、明晰な眼差しにも、大事なものを失った悲しみ・儘^{まま}ならない寂寥感^{せきりょう}・尽きない憂慮…すべてが写り込んでいるように感じました。

フランクは、2年前に妻を亡くし、その痛手からずっと立ち直れずにいた老いた開業医に、「もしあなたのほうが先に亡くなられていたら、どうなったでしょう。つまり奥様の方が、あなたより長く生き長らえていたとしたら」と質問を投げかけます。その医師は「妻は大変苦しんだに違いないありません」と答えます。フランクは「おわかりでしょう、先生？奥様はその苦しみを免れることができたのです。そしてそうした苦しみから奥様を救ったのは、先生、ほかならないあなたなのです。です

から今、奥様を失った悲しみにあなたが打ちひしがれていることには意味があります。奥様が受けたかもしれない苦しみを、あなたが代わって苦しんでいるという意味があるのです」。

「妻に先立たれた」という事実は変えることはできませんが、自分の今の苦しみは「妻の犠牲」と言う意味がある、そのような見方ができれば苦しみは耐えるに値するものに変わっていくはずだと、フランクフルはコメントしています。

本書には、「人は、この世にもはやなにも残されていなくても、心の奥底で愛する人の面影に思いをこらせば、ほんのいつときにせよ至福の境地になれることを、わたしは理解した。～人は内に秘めた愛する人のまなざしや愛する人の面影を精神力で呼び出すことにより、満たされることができるのだ。」

辛い別れや尽きない心配事を、どのように切り抜けていくかは、他者の問題でも、遠い未来の問題でもありません。「今・ここ・私」の問題です。（次回に続く）